

がこわばってしまった。

坑口が、すぐ頭の上だった。

眩しいばかりの陽光もさしこんでくれば、坑外夫らの話し声もがんが響いてくる。私が送る信号もはつきり聞こえるのだ。

スカフォールドの部下たちは活気づいて、騒々しくさえなってきた。

それなのに私だけがこちこち、ついには足ががくがくと震えてきた。

必死の思いで、人目を取りつくろった。

そんなにも間近な坑口が、このときほど遠く感じたこともなければ、時間がそんなにまだるっこく感じたこともない。

よれよれになって坑口に這いあがると、そのままへたへたと座りこんでしまった。

奇しくも三周忌の三月二十四日……。

最後の最後まで悪縁に振り回されて、やっと全工事が終了した。

二年前も疲労困憊こんぱい。それ以上に今度も、よれよれ、ふらふらの解放だった。

Ⅵ なみだ船

1

親会社の企業合理化が急を告げていた。

石炭鉱業調査団による全国炭鉱の調査が大詰めを迎え、あとは常磐炭鉱を残すのみとなっていたのである。

この調査を終えて、どんな正式答案を政府に提出するのか、業界労使が固唾を呑んでその動向を注視していた。もはや人員整理を含む抜本的な合理化が、調査団の答申案に盛りこまれるのは避けられそうもない。

いよいよ、立坑の早期開設と急速施工が緊急性を帯びてきた。

すでに東部鉱では、初めて通気兼用の運搬立坑、鹿島第二立坑（深度762メートル）に着手しており、住友建設はこれに西ドイツ製の立坑専用捲上機、ボビン捲き（複胴）を導入している。合理化も立坑も、常に東部鉱が一步も二歩も西部鉱に先んじていた。

だが長期的展望では、炭質や炭量、あるいは生産コストなどから西部鉱の大型開発が死活的な急務となっている。そのため俄然、立坑の開削計画が目白押しに打ちだされた。

その第一弾として、湯長谷立坑完成直後、泉田第一立坑（深度557メートル）の開削工事が常磐開発に発注された。着工は八月、工期は一年半という厳しい条件つきである。

工期は、大越社長の上命令だという。ただし、計画の段階から施工者の野木を参画させ、その意見を十分に盛りこめという異例のお墨付きがくっついてきた。

名指しされたことは光栄に思うべきだろうが、それは先方の都合で、当事者にすれば有難迷惑もいところである。

発注者側の計画担当者として、湯長谷の崩落事故で更迭された松岡が起用された。

「言わば俺はあんたの下働きってとこ。何でもすっから、どどん注文つけてくんちえ」

後輩の引き立て役にもかかわらず、松岡は嫌がりもしなければ悪びれてもない。

長い冷やめし食らい、そしてもう浮かびあがることもあるまいと思われるのだが、暗さや恨みまがしさは少しもない。もう立坑はうんざりと多分に気乗り薄だった私も、彼の好意に打たれてやっとな腹をくくった。

同時期、坑道掘進係は、湯本五坑の斜坑本線の中段から入る岩石坑道掘進工事を受注した。採掘跡の空洞充填用のフライアッシュを流体輸送するパイプの布設坑道である。

私は、立坑着工までの時間稼ぎにこの工事を貰い受け、立坑チームをこれに投入した。

熟慮断行、茂吉に全采配を委ねた。

茂吉たるや、立坑終了後も原隊復帰を嫌がり、強引に会社に渡りをつけて、そのまま立坑開削係に居据わってしまったのである。

そればかりか茂吉は、会う人ごとに、

「俺の親方は野木英雄。野木は俺の親方」

と、吹聴したのである。

「やくざでないから、親方、おいらは一匹狼の看板ははずしました」という。親方だけは聞こえがよくないから止せと言ったが、てんで聞くものではない。「親方は気にしないでおくんなんしょ」と、一人で有卦うけに入っているのである。

私との奇妙なコンビをいぶかる相手には、

「まんず、弁慶と牛若丸ってなもんだな」

と、笑い飛ばして煙に巻いている。

私は小柄で身長162センチ、体重は茂吉の半分、当たってないこともない。

湯長谷では茂吉に構っている暇もなかったが、彼の方は一人で私に傾倒しだし、私の挙動をギョロ目で追いかけていた。人間に飢えたような目でもあったが、いつしかその目に人間回復のうるおいも笑みもこぼれるようになった。それは実に人懐なつっこいものであり、それに私もほだされもして、ついつい彼をほいとは放りだせなくなっていたのである。

パイプ坑の工事を委ねるまえ、私は、

「いいかモーヤん、みんなの尻は叩く必要はねえ。安全で仕事のしやすい環境づくりだけ考えろ。それに我々は業者で、親会社の人間はお客様だ。決して手荒な真似はすんなよ」

と、くどいほど茂吉に念を押しした。

部内の反対を抑えての冒険的起用で、私自身、虎を野に放つ結果になりはしまいかとさんさん迷っていたのである。

「もうおいらは昔のモーヤんでねえ。信用しておくんなんしょ。これでも餓鬼のころから年季を積んだモグラ、任せておくんなせえ」

茂吉は、大変な意気込みである。

彼は、天下晴れてのこんなデビューは思いもしなかったのだろう。言わば、主務者級の現場の大將である。私の言葉も上の空で、昔鳴らした顔とギョロ目に物言わせ、親会社の運搬係や機電係、果ては資材係まであまねく渡りをつけ、鳴り物入りで現場に乗りこんでいった。

私が心配してのぞくと、彼は、

「現場はおいらに任せて、親方は立坑の計画にかかりきってくらっせえ。親方に見てられっと、どうも仕事がやりづらくて敵わねえ」

と、いつも私を追いだす算段だ。

現場は運搬斜坑の途中で、配車条件はすこぶるいい。それでなくても茂吉が手をあげただけで、全速運転の列車もびたりと停車する。運搬夫にはならず者が多いが、茂吉には歯が立たない。さらに工員た

ちは立坑仕込みで、手を抜くということはないのである。

工事は、のっけから快足ペースで進んだ。

私はこの工事の着手を前に、高効率高賃金の、独自の賃金査定システムを作成して会社を納得させた。まだまだ親会社の画一的な管理方式から脱却できない会社側は、私の独走に難色も示したが、次期立坑の布石だと言い張るとしぶしぶ譲歩した。

その賃金システムの導入もチームの士気を煽り、一人当たり能率は手積みにもかかわらず、本職従業員の2・5倍という驚異的数字となった。そのため本家本元の坑道掘進係が、一種のパニック状態に陥った。

ここぞとばかり茂吉が、古巣の詰所で、

「どだい、頭も腕も気っ風も、糞つたれのおめえらの係長、林とは段ちげえだわい」と、係員らにうっ憤をぶちまけていた。

成長と言うべきか脱皮と言うべきか、茂吉の人間の変身には見るべきものがあつた。

立坑に現われたころは、さんざん利用されてほいと捨てられたという、恨みまじりの人間不信に陥っていた。荒々しさと刺々しさ、そして人には嵩にかかった押しつけがましさが目に余っていたが、それが影をひそめ、人の喜びや悲しみを我が物ともして慈しみだしてきたのである。

現場ではあくまで裏方に徹して、部下工員たちや仕事を盛りたて、荒削りだが実に快活なチームワ

クを作っていた。なかなか義侠心に富む、一途な男だったのである。

親会社の間でも「猛烈なチームが岩延をやってる」と評判になり、わざわざ切羽をのぞきにくる者がいたが、仕事ぶりよりも、茂吉の変わりようとうと茂吉と工員たちの親密なチームワークにびっくりしたようである。

おかげで私は、立坑の計画に専念できた。

渡辺が横からくちばしを入れ、発破工法に切り替えろと言っけきかない。社長肝煎りの立坑に自分も一枚噛まなければという顕示欲が見え見えで、私は耳を貸さなかった。

彼が言う機械化は、禰一本の下半身に背広をひっかけるようなものである。立坑は何と言っても主捲きの性能が決定的なキープポイントで、住友建設のように大型ダブル捲上機を設け、立坑槽の天辺からスカフォードまで大改造して初めて全うされるのだ。在来の機械設備をそのまま転用する常磐式では、発破工法の採用は角を矯めて牛を殺す結果にもなりかねないのである。

それよりは先人たちが心血を注いできた常磐式工法と旧式の機械設備が、完全機械化の真つただ中でお存立し得る余地があるのかどうか、また能力限界や経済性はどうか、検証も追及もしたかったのである。

ただ築壁は、コンクリート流し込み、それも流し込み管を二本併設するという連続流し込み方式を、松岡に提案した。

コンクリートブロック積みは、湧水が多い場合でも所要の強度が均等に得られ、施工性も良い。だ

が、割高なうえ、劣勢な捲き能力では資材搬出入にかなりの時間を食うので、流し込み方式に軍配をあげたのである。

親会社は自社製品にこだわる以上に、立坑の工期を重視していた。だいぶ異論が続出したが、結局は私の提案を容認した。

常磐開発側には、工員輸送と資材運搬の幌かけ中型車（ジュピター）の購入と、昼夜二交代の専属運転手の手配をねだった。

ついでに私は、専用バイクをねだりにねだった。短気で飲ん兵衛の私には危いと社内の物議をかもしたが、北沢社長の専決でなんとか物にし、これでようやく通勤地獄の桎梏から解放されたのである。

計画や準備はほほ思惑どおりに進んでいったが、それだけに後が怖かった。計画や準備はほほ思惑どおりに進んでいったが、それだけに後が怖かった。事故はもちろん、管理ミスによる中断や失速が許されないのである。そして大難敵の湧水も無難に処理しなければならぬ。地質柱状は湯長谷と同じで、増水傾向や最大湧水量も全く同じと想定するほかない。考えてみれば、楽観材料は一つもないのである。

七月に入ると、敷地造成や建屋工事が終わり、櫓や捲上機などの仮設備工事が突貫体制で進められていった。常磐開発の労務係は、閉山炭坑の各集落をかけずり回っていた。

八月初め、北沢社長が私にほのめかしていた北海道への出張旅行が決まった。北炭夕張と住友赤平、および羽幌炭坑の立坑見学という名目だが、多分に慰労的な含みがある。

渡辺が日程を組み、坑道掘進の林がおこぼれで同行した。林と一緒では、立坑見学もお座なりとなり、じっくりと研修する暇もなかった。

工法や機械化は技術誌の紹介記事の先行や誇張が目立ち、各現場の実態はかなり迫力を欠いたものになっていた。

特に設備投資に比べて、労力の節減と転用という省力化に不徹底のうらみがあった。機械化の上にあぐらをかいているような、漫然として大様な管理体制が目立った。そのあたり、わが常磐式工法も、まだまだ競合できる余地は十分にあるとひそかに意を強くしたほどである。

北炭職員クラブで見かけた社長の檄文と、羽幌炭砒の闇雲な大型開発が、エネルギー革命に揺れる業界や炭砒人の命運を、いみじくも対照的に暗示していた。

前者は危機的状況の把握と問題意識が希薄だとして、社長が全従業員に総決起を促している。国内屈指の優良炭砒だ。組合員の構造的な驕りや甘えが目に見えるようだった。

後者では、炭砒資本のがむしゃらな鼻息に毒気を抜かれた。鉄道新線の建設に狂奔しているのである。合理化なんて代物ではない。満艦飾の料亭で豪華な接待を受けたが、中座して裏側をのぞいたら、町並みは西部劇の野外セットのように奥行きがない。うすら寒くもなっていて、酔いもさめてしまった。

出張から戻ると、石炭鉱業調査団の黒塗りの高級乗用車が列をなして走り回っていた。

全山、重苦しい空気に覆われていた。

2

湯長谷立坑の南方約3キロの山間部に、浜街道に直交して東西に細長い泉田集落がある。

泉田第一立坑は、集落の西はずれの用水池を見下ろす高台に位置していた。三方山で囲まれ、敷地は南に向かって開けている。

坑口は北側の崖下で、立坑槽をはじめ主要機械設備はすべて湯長谷立坑から移設したものである。これにコンクリート流し込み設備が加わった。高さ15メートルのバッチャープラントである。その頂部の骨材貯蔵ビンに向かって、地上から長さ50メートルのベルトコンベヤーが這いあがっていた。

敷地東側の山沿いには、鍛冶場、倉庫、ピック修理場、工員休憩所、風呂場などが縦一列に並んで建てられた。

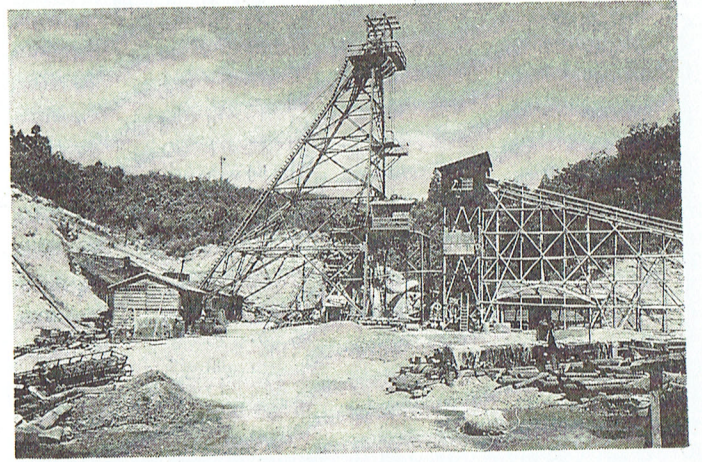
事務所は、立坑の全景を一望できる敷地南端に構え、私は立坑槽を真つ正面に見据える二階の一角に陣取った。

事務所に、渡辺の机はない。名実ともに、初めて私は自分の城を持ったのである。

立坑開削係も、初めて自前の形をなした。

スタッフは、常一番（日勤）係員二、三交代係員三、機電係員一、運転手二、事務員一で、私以下一〇名の新世帯である。

女房役は湯長谷以来の星野である。茂吉と同年齢で、経理事務や資材業務をこなすほか、坑外保安係員の資格も持つ重宝な存在である。また私の良きスポークスマンでもあり、七面倒臭い本部との交渉事



ありし日の泉田第一立坑の坑口と立坑櫓

はすべて彼に押しつけていた。私だと、本部機構がいまだに恋々として引きずっている官僚形式主義と、すぐ衝突してしまうのである。またとない女房役だが、私が頼りにするように茂吉も当てにして、星野を同年兵と呼んで立てている。

茂吉は意欲満々だが、なにしろ靴下をはくにもひと苦勞する巨体である。せまい坑内では邪魔にこそなれ、即戦力としては期待できない。坑内外全般の世話役的な常一番係員としたが、そのかわら、私は彼に大学ノートと算盤を預けて原価管理の勉強をさせることにした。折角の変身に、なんらかのためになる色も花も添えてやりたかったのである。

三交代係員の磯純夫は、はるか平の先の旧日曹赤井炭坑の炭住からバイク通勤している。一見おだやかな青年(33歳)だが、閉山の苦勞が身になったのか粘り強くて、万事に目はしがきく。機械にも強くて、立坑マンとしてはびったりの素材である。

吉田茂は私と同じ昭和二年生まれで35歳、フライアッシュパイプ坑で工員から係員に抜擢したものである。彼も閉山経験者で、土方からとび職まで多彩な荒仕事を転々として立坑に來ている。見かけはひょうひょうとした小柄な僂男だが、どっこい小粒の山椒サシヤウ、やくざあがりも一目を置くほど肝っ玉が太い。

鈴木一正(29歳)は工業高校卒の生っ粋の職員(雇員、茂吉も同じ)で、坑道掘進係から転属した新進気鋭である。だが、立坑に行ったら殺されるぞと、仲間に脅されたらしい。まるで人身御供にでもなったように、しょんぼりと現れた。

機電係員の服部は常磐炭礦の定年退職者で、元湯本礦の機電主務者である。きまじめな御仁だが、俺でも勤まるかなと、初の立坑勤務を危ぶんでいた。

運転手の二人は、揃って威勢がいい。

小柄な井原(27歳)は木曾は伊那生まれのきかん坊で、減法いきがよくてすばしっこい。東京の道路で磨きかけたというだけあって、運転は神風タクシー並みである。

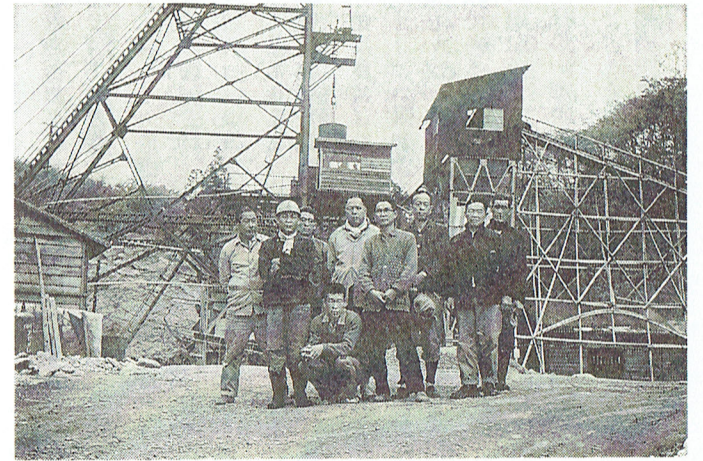
菊地(38歳)は、元常磐炭礦の捲上機運転工、転じてバス運転手、さらにタクシー運転手と、いずれも喧嘩で職場を替えてきた荒くれ者だ。地元の運転手仲間ではいい顔で、「政やん」で通っている。

女事務員が、三人も入れ替わった。

初めは高校を出たばかりの地元の娘だったが、荒っぽい現場の空気にすくみあがって、一週間ともたなかった。



親会社の測量係員らと（真ん中が好漢も一やん、その左隣が筆者・野木）



坑外間接夫らと（ヘルメットが筆者・野木）

次はきんきらきんの湯本の町娘で、ハイヒールにショートスカート、目もあざやかなネッカチーフを風になびかせてしゃなりしゃなりとご出勤だ。俄然、みんながそわそわしたが、それも十日ばかりで、「私、モデルになるの」と、流し目くられて消えていった。

あとで労務屋に聞くと、熱海の芸者になったという。みんな、口をあんぐりだ。

最後は水野夫人で、夫は茂吉とも顔馴染みの炭礦の労務屋である。読み書き算盤、何でもござれの姥桜だ。茂吉が、「このおっかあなら、煮ても焼いても食えねえ」と太鼓判を押し、やっと事務所の体裁が整った。

捲上機や空気圧縮機の運転手など、坑外間接夫のほとんどが常磐炭礦の定年退職者で、三交代のズリあけ夫は一般土工で占められていた。新たに女雑役二人が加わった。

新規に二〇名の坑内直接夫が補充された。

旧メンバー以上に面構えがふてくして柄が悪い。閉山炭坑の元坑夫が多いが、常磐炭礦をお払い箱になった不良破員も交じっていた。傷害の前科を持つ町の与太者もいて、質よりは員数揃えに汲々とした労務屋たちの苦勞と焦りが一目瞭然だ。

さすがの茂吉も、

「これでは愚連隊。よくも集めたもんだ」

と、言っただけで感心していた。

彼が呆れるくらいだから推して知るべし、私は即座に「立坑独立愚連隊」と命名、北光坑水抜斜坑以

来の方針を、隊則として工員休憩所に掲示した。

工事は、のっけから急ピッチで進んだ。

旧メンバーの工員たちが、期待どおり中核となって見事な牽引力を発揮した。

彼らは半年ぶりの大型ピックを懐かしげに握りしめるや、豪快に振りかざして猛然とダッシュした。たちまち、轟音が立坑構内と周辺を圧倒した。そうなれば、一切の雑念や雑音はいっぺんで消し飛ぶ。もはや彼らの眼中には、新入りの味噌も糞もない。これが立坑、これが立坑の流儀とばかり、私の先を行くような手本と覇気を余す所なく披歴してくれたのである。

初めは尻込みしていた新顔が、恐る恐る古顔の後を追っかけた。腕におぼえのある連中は、早くもピックを我が物にしようと目の色を変えた。ピックにもスコップにもついていけない半端者は、開幕早々から次々と尻割れしていった。

わずか一か月の間に、新顔の半数が入れ替わった。激しい出入りに、労務係も連日事務所と閉山集落の間を駆けずり回った。

去る者は追わず来る者は拒まず、私は自然な定着をじっくりと待っていた。

いきなり初回から、月間60メートルの快記録が期せずして生まれた。早くも関係各方面で話題になり、高能率高賃金を伝え聞いた住友建設の組夫が、鞍替えしたいと労務屋の前に現れた。それは仁義に反する引き抜きともなるので、労務屋に門前払いをさせたが……。

坑内の熱気に煽られ、いちばんおたおたしていたのはズリあけ夫だ。間断なく捲き上げられてくるズリと、山腹カーブで脱線ばかりする炭車を持て余して悪戦苦闘していた。

なにしろ彼らは線路の扱いも、どうして脱線するのもろくに分からない。茂吉が俺の出番だとばかり、厳しい残暑が続くなか、下半身は種一本に巻脚絆というあられもない恰好で、息を切らしながら急坂をのぼりおりしていた。禿げ頭も火を吹いていた。

茂吉はいまや人気者で、その周囲には絶えず爆笑が渦巻いていた。なにしろ俗界の彼の人脈は幅広く、その足跡の及ばぬ所はない。どこの馬の骨とも分からぬ人種でも、彼がほじくりだすとすぐ共通のコネがついてしまうのだ。会社のお偉方はおろか、いわきの名士も、「みんな友達だあ」と、うそぶく茂吉なのである。彼がみんなを手なづけ、人気を独りじめするのに手間暇はかからなかった。

彼はまた、私と部下たちの間をとりなす緩衝的役割も果たしていた。ときには私をワンマンだとか因業たかりだとかくさして、みんなを笑わせていた。それも意識的なおどけであって、私を浮きあがらせないための彼なりの気配りだったのである。

畏怖されたモーヤんから愛されるモーヤンへと、もはや彼は立坑の象徴的存在ともなった。昔の彼しか知らない者は恐らく信じないだろうが――。

鈴木係員の進境が目ざましい。中肉中背のきりっとした男前だが、若だけあって順応性も呑み込みも早い。みるみるうちに何も彼も立坑風に染まって、茂吉が弟分のように面倒を見ていた。人も恐れる著名人の、思わぬ知遇にも発奮したようである。

坑外間接職種の人たちは、みんなさんづけで呼ばなければならぬ年配者だが、温健な人たちはばかりで仕事に忠実だった。そしてそれらを頑固主務者で鳴らした服部老人がよくまとめ、坑内から噴きあがる工員たちの熱気をがっちり受けとめてくれた。

特に捲方（捲上機運転手）は最も多忙で、中食時も運転席から離れられない。むすびを頼張りながら捲き上げ信号を待つのが常だったが、愚痴をこぼさないばかりか、一本のロープで工員たちと気脈を通じることが即第二の人生の生き甲斐のようだった。

期せずして坑外各部署の受け皿が自然と整い、私が望んでやまなかった阿吽の呼吸が、意外に早く出揃ったのである。

「者ども、位置につけえ！」

茂吉の号令に、気合いが入ってきた。

何をするにも、その号令が飛ぶ。

終わりを告げるときは、「打ち方止めえ」。

とりわけ「乞食の酒盛り」の離合集散は、その号令が冴えて物の見事に決まっていた。

即席のミニ宴会を称して、「乞食の酒盛り」と呼んでいた。文字どおり粗酒粗肴である。

きっかけや発想も即席、かつ衝動的だ。

記録が出たときや一階梯の区切りがついた場合が多いが、士気昂揚と称して、茂吉が誘導することも珍しくなかったのである。

茂吉は、禿げ頭や太鼓腹を撫でながら、

「ねえ、親方、一杯、やってもよかつぱ」

と、いつも上手に誘い水をかけてきた。

虫の居所が悪いと刎ねつけたが、もともと酒や賑やかな雰囲気は好きな方である。つつい乗ってしまふことが多かった。

そうなるに茂吉は電光石火、星野に軍資金をせびり、運転手をせきたてて酒や肴の調達に飛びだしていくのである。

酒盛りははなから無礼講で、それこそ茂吉の独壇場だ。私まで酒の肴にされてしまう。ときには風呂あがりの工員を呼びこみ、あるいは工員休憩所にお裾分けして一緒に騒ぐ。とにかく乞食の酒盛りは、上も下もなくあけっぴろげで、底抜けに陽気で騒がしい。部長が、いよいよ社長が現れようが気にとめず、それだけは天下御免だったのである。

工事が活況を呈する一方では、幌かけ専門車も街道筋で名物化していった。

内郷の山奥の閉山集落を振りだしに、街道の要所要所で待つ工員たちを次々と拾って走る訳だが、国道筋では親会社の最新型通勤バスが列をなして走っている。その中では、幌馬車のように目立ってしまふのである。

それでも怯まず憶せず、昼も夜も走りまわった。菊地はいつもねじり鉢巻きで、そのけそこのけ喧嘩政のお通りだと、強引にバスを抜き去っていく。井原も口角泡を飛ばして掻き分けていく。そんな運

転手のそばでは、茂吉がギョロ目で睨んでいるのである。

たいていの車が、素直に先を譲った。

「あれは立坑の幌馬車、下手に構うな」

3

十月下旬、坑口深度は100メートルを越え、早くも難関の五安砂岩層に突入した。

案の定、小礫まじり粗粒砂岩の側壁から、じわじわと湧水が滲出してきた。

計画段階から、その湧水との対決を思い描かない日は一日とてない。私は満を持して、かねてから温めていた止水工法の展開に踏み切った。素掘り断面を拡大して、コンクリートとコンクリートブロックの二重築壁構造としたのである。

一方、渡辺は礦務部事務係長とはかり、またもや防水屋を呼ぶ手配をつけていた。

その前には前触れもなく、住友と同型の積込機を立坑に送りつけてよこした。さあ使え、さあ機械化だと言わんばかりである。

私は積込機も野ざらしのまま放置していたほか、薬液注入すら全く念頭に置いていなかったのである。

施工技術の原点はあくまで現場である。それが権力やそれに媚びる者によって無視されては、反感を抱かない訳にはいかない。

まして薬液注入とは半ば義理付き合いで、血の滲むような苦勞を強いられた。それだけならまだしも、止まらなかった湯長谷立坑の湧水の大半が、いま立坑下に乱れ落ちていくという。あたら工事費も苦勞も水の泡、結局は防水屋の懐を肥やすあぶく銭となってしまったのである。嫌でも、薬液を押しつける裏側の後ろ暗い部分が透けて見えてならない。

営業先行型の止水技術も鼻についてならない。地下深所の被圧水の怖さやしぶとさが骨身にしみた私にすれば、もはや力で喧嘩しても敵わないと思っっている。むしろ恐れにも似た遠慮が次第に昂じてきて、湧水との共存的な方策をもつばら模索していたのである。

つまり攻めるよりは受け身に転じて、立坑という構造物自体をより防水的にすればよいのではないかと、だいたい考えがソフトになっていたのである。その点、湧水に真っ向から大上段に構える防水屋に比べれば、私の方が正真正銘、より防水的であろう。

私は、素掘り拡大した坑壁全面に、うすい波型亜鉛鉄板を巻いて掘り下がった。立坑本体を、トタンで巻巻きにしたのである。当然岩盤との間に空隙が残るが、実はその人工空隙がみそで、築壁終了後、セメントミルクで空隙を充填して湧水を遮断しようというものである。

五安砂岩層は層厚37メートルで、坑口下145メートルの底部で湧水量は毎分35立方呎に達した。拡大掘削と二重築壁に要した実日数は34日で、さすがに進行ペースは半減している。

人工空隙は、岩盤と構造物を一体化させるという覆工の概念からすれば、明らかに邪道である。親会社の常駐監督者が、「危いんじゃねえの」と眉をひそめたが、どんな良質のコンクリート構造物でも敵

密には地山との間に微細な間隙は残るものである。私は、含水層が安定した自立岩盤であるため、むしろ望ましい方策だとして平然と押し切った。

なにしろ、吊り天井の下での実戦的経験が物を言えば、それがまた新技法開発の素地ともなっていたのである。

セメント注入も型破りである。坑口バッチャープラントでセメントミルを作り、導入管を通じて連続的に流し込むというもの。端末にはタコ管を設置、複数方向に同時注入して湧水を一挙に追いつめ、完全にシャットアウトしようというのである。自然流下でも湧水圧をはるかにこえるから、注入ポンプも全く必要としない。これほど簡便で合理的、かつ経済的な注入法もあるまい。

注入作業は白坂層の頭部に築造したフーチングを基点として、師走初旬、四昼夜にわたって休みなく続けられた。

果たせるかな、ミルクまみれの目まぐるしい追撃戦になった。怒り狂った湧水は観測孔から弧を描いて噴出落下、バタバタとゴムの合羽を乱打した。スカフォード上は、ミルクまじりの横殴りの雨が矢のように交錯して目もあいていられない。

水勢と水量は含水層の上限位置まで少しも衰えず、自信を持つてのぞんだ私もさすがに焦りだした。だが、募る不安を押さえながら辛抱強く耐えたところ、急に腰を折ったように水量がぐんと減りだした。

はっとするほど唐突な変化で、その後は生き死にの境もかくやと思うほど水は息を抜き、ひっそりと物静かに引いていった。

ごく狭い範囲のコンクリートブロックの目地から、糸を引いて吹きだす断末魔の真清水が印象的だった。それを一つ一つ、丹念なコーキング（かしめ作業）で封じこめた。

怒濤のような攻めから、最後は水と一問一答するような、実にしんみりとした打ち止めになったのである。

成功率は100%で、水は再び悠久無限の営みと静謐を取り戻して、そっと立坑を包みこんでくれた。壁裏の推定空隙量は20立方メートル、これに対する注入セメント量は1800袋だった。これが薬液注入だと、工期も工事費もおよそ四倍増になるだろう。

日本綜合防水の社長が、たまたま止水工事中に來所した。彼は私の計画図を見ただけで、「私らの出る幕は、もう全くない」と脱帽して、早々と退散した。

だが渡辺は、薬液を発注すみで、新たに開発されたLW工法を試せと言っけかかない。水野谷層の微量な湧水を対象に施工したが、成功率はせいぜい70%止まりで、防水屋たちも尻尾を巻いて退散したのである。

半世紀も苦杯をなめ続けてきた立坑の止水問題は、かくてついに結着を見た。

ちなみにこの止水法は、のちに特殊トンネル止水工法として、工法特許を得た。また、ハイドロックおよびケ・ミイ・ゼクト工法は後年公害問題化して、全面的に使用禁止となった。LW工法はいまも広

く使用され、日本綜合防水は薬液業界の代表的企業に成長をとげている。

坑内労働環境が、がらっと一変した。

長梅雨があけたようなさわやかさだ。快適でさえある。滴水あみさえなければ、四季を通じて半袖シャツで過ごせるのである。工員たちは、重たいゴムの合羽をぬぎ捨てた。身のこなしは軽やかで表情はさっぱり、いよいよ急速施工にはずみがついてきたのである。

止水工事後、私はこれも懸案だったズリ積みの半機械化に成功した。

名づけて、「ムルデ工法」。

外尾東大助教授の新著「ソ連の立坑技術」の中の、積込みトイ（ムルデ）にヒントを得たので、そう呼んだのである。

ムルデは庭掃除のチリ取りに似た形状で、私が製作したのはほぼキブル大の大型ムルデである。これを坑底に置いて、キブル一往復間に掘削ズリを満載にしておく。キブルが到達後、スカフォードに据えつけたホイスト捲きでムルデを吊るしあげ、キブルに転倒あけて積み替えるのである。

実に素朴な仕掛けだが、キブルへの直接積みの労力が半減化したほか、一回のズリ積み時間を従来の平均四分分から、一挙に一分強に圧縮するという大成果を生んだ。

ムルデの高さはキブルの半分もない。労力は半減したが、それ以上に手積みという精神的重圧をほぼ解消したということが大きい。

工員たちはムルデの誕生を手放して喜び、

「どうも、どうも、どうもね……」

と、素直に礼を言った。

止水に成功したときは、天国と地獄の違いだと喜んでいて。今度は、仕事が楽しくなったとまで言うてくれた。そんな無心の喜びほど、技術者冥利に尽きるものはない。

掘進速度が一挙に早まり、一躍、ムルデ、ムルデ工法の名は関係各方面に広まった。

そして因縁の三月（昭和三十八年）には、堂々、75メートルの新記録を達成した。これより少し前、住友側では67メートルをマークして、私の記録を抜いたと大騒ぎしている。

あつという間の、快心の記録奪回だった。

早速、鉱業所長が祝い酒を送り届けてくれたが、いまや親会社も火の車だ。

石炭鉱業調査団が、常磐は育成すべき優秀炭鉱には属しないと裁定したのである。

会社側は、急ぎよ、「危機突破再建計画」を打ちだし、五十歳以上の高齢者整理案を労働組合と職員組合に提示した。

労組は独自の再建案で人員整理を拒絶したが、職員組合は五十二歳以上の勇退を容認、二月一日付けで百余名の職員が退職した。

これにより労組もついに折れて、千二百余名がしぶしぶ勇退した。

この重大時期に労働組合長はヤマを離れ、各種業界の労組幹部とアメリカの研修旅行に旅立ってい

る。そればかりか視察団が帰国後も、何故か五十余日も米国に長期滞在して、人員整理後にやっと帰山したのである。

職員組合長たるや、ソ連の研修旅行だ。

年中行事化した組合幹部の外遊も目に余るが、組合幹部らの地域行政や経済諸団体への顔の売り込みも俄に活発化しだした。

ビルドアンドスクラップの論理では、どんな人間たちがビルドアップされるのか、またどんな階層の人間たちがスクラップにされてしまうのか、全く混沌としてきた。労使協調主義や一山一家の真偽を問われる秋にきてもいたが、どうやらその底が割れ、尻尾や正体が何となく見え隠れしてきたようである。

立坑部隊は、脇目も振らず快走を続けた。

四月には坑口下400メートルの深度に達した。

四月も早く着工した住友建設の立坑を、いともあっさり抜き去っていたのである。

4

好事魔多し、恐れに恐れていた転落事故が発生した。吉田茂係員が、スカフォードから25メートル下の坑底に墜落したのである。

四月も末の公休作業で、吉田茂は築壁後の堰板はずしを指揮していた。

たまたま事務所にいた私は、急を聞いて血の気を失った。落下距離を思うと絶望的で、一瞬、目の前が真っ暗になった。

坑口に駆けつけると、主捲きロープはするすると静かに降下していた。工員たちが、キブルで救助に向かっているという。

私は坑口座張りに片膝をつき、片手拝みでひたすら祈り続けた。

(茂やん、生きてろ！ 生きててくれ!!)

身も世もなく、祈る姿を人目にさらしたのは後にも先にもこのときしかない。

やがて捲き上げ信号が鳴り、ロープが身震いして上昇を開始すると、胸は早鐘のように鳴りだした。

ロープが加速度をつけてぐんぐん震えだすと、私の胸もわなわなと震えた。

坑口下の減速区間に入って、ロープがぶるぶるしたすと、もはや私の祈りはもつれて、体がすっかり硬直してしまった。

突然、真下から大音声が湧きあがった。

「助かった助かったあ、助かったぞオ……」

その一瞬、何が何だか分からなくなり、私の頭は完全に空っぽになっていた。

一瞬後には、キブルが目の前にあった。

吉田茂が、顔をだして笑っていた。

「係長、すみません。へましちまって」

彼は悪戯いたづらっ子のように、はにかんでいた。

(これは奇跡？ 祈りが通じたのか!?)

私の顔は、もうくしゃくしゃだった。

右足首が複雑骨折したものの、奇跡的に吉田茂は生還したのである。誰もが奇跡だと言って、彼の強運に舌を巻いた。

調整フィヤス・メカニクス板をバルで引き剥がした途端、体勢が崩れて三角扉から墜落したという。三角扉の開放は、スカフォールドの運行時以外は禁じている。明らかに吉田の落ち度である。

それにしても強運だ。いまは築壁時だけに着用するゴムの合羽が、落下傘のように広がって空気抵抗になったとか、30センチほどの坑底の沈澱ミルクがクッションになったとか、色んな憶説が乱れ飛んだ。みんな一理はあるが、私には奇跡としか思えなかった。

吉田茂は落下中も意識がはつきりしていたようで、「落ちそこなった」と、けろりと言っただけだ。

肝っ玉の太さにあらためて舌を巻いたが、完治は望み薄で、立坑復帰はほとんど不可能、という診断が下された。

生と死が紙一重と言われていた立坑だが、いまさらながら怖さが身にしみ、しばらくは何をするにも手足がすくんでしまった……。

墜落事故で部下たちも委縮するのではと心配したが、それは全く杞憂に終わった。

それどころかますます意気軒昂、五月には三月に次ぐ70メートルの記録をマークした。

吉田茂の後任には、元常磐労組支部の副支部長という熊谷を労務係が連れてきた。

女と金がらみのスキャンダルで、組合を追われた問題人物だという。労務係は、「こんなのしかいない」と頭を掻いたが、構うもんかと私は受け入れた。そんな輩やからが屁理屈並べたところで、動ずる部下たちではないのである。

案の定、熊谷はおだをあげる間もあらばこそ、たちまち立坑一色に染めあげられてしまった。それが本来の地なのか、柄や口の悪さは工員たちに勝るとも劣らない。

六月中旬、泉田第一立坑は坑口下557メートルに達して、立坑下坑道に貫通した。はしなくも、大変な新記録が生まれた。

止水工事期間を含めても、月間平均57メートルという国内最高のハイペースである。

ちなみに深度400メートルを越える全国40本の大型立坑の、この年度の月間平均は41メートルであった。すべて鳴り物入りの機械化立坑である。住友建設が施工の鹿島第二立坑2号坑の場合は、わずかに35メートルに過ぎなかった。

ついにピック掘り手積みタテマキの常磐式工法が、国立立坑界の頂点に立ったのである。しかも愚連隊とか、屑の集まりとか言われた人間たちが、あっさり物にしてしまったのである。

私は会社にねだり、初めて貫通祝いなるものを盛大に開いた。工員たちを引き連れて、大挙、日光と鬼怒川に繰り出したのである。



一世一代？の晴れ姿で慰安旅行。日光はホントにケッコーでした。（華厳の滝前で。後列、ほぼ真ん中の偉丈夫がもーやん）

サングラスをかけた茂吉の巨体が、断然、人目を引いた。そのままでも、ギャング映画のボス役になれそうな迫力と貫禄がある。

彼を先頭に一行が押し出すと、東照宮の参拝者や華厳滝の観光客などが、慌てて道をあけて遣り過ごしていた。茂吉に続く面々はなんとも横振れがひどくて、行列が幅ったくてしどけない。腰に手拭い、肩に洋傘、それで炭坑弁丸出しで練り歩いていくのである。誰が見てもどうも最（ひ）き目に見ても、「愚連隊ご一行様の御成り」としか言いようがない。

鬼怒川温泉での祝宴は、専属楽団の歓迎マーチで賑やかに幕があいた。旅館恒例のサービスとも知らずに、温泉街あげての貫通祝いだと、工員たちがどつと湧いた。

鈴木係員が舞台に飛びだし、十八番の「なみだ船」を唄いだすと、全員が唱和した。

涙の、終わりのひとしずく

ゴムの合羽に しみとおる

どせ俺らは やんしゅうかもめ

泣くな恨むな 北海の

海に芽をふく 恋の花

北島三郎の演歌である。いつの間にか、立坑の象徴的演歌として定着していた。

「ゴムの合羽」に、立坑マンの哀愴が凝縮されている。けれど立坑も荒海、漁師もたじろぐ奈落の底だ。やんしゅうかもめと変わらぬ運命を嘆くのかこらえるのか、誰もが思い入れたっぷりに歌いこんでいる。

序奏から悲愴がみなぎるメロディーだが、泣くもんか負けるもんかと、尻上がりに血が沸いてくる。吉田茂を思いながら、私も胸を熱くして唱和した。

七月下旬、坑底風道工事を終えて全工事が完成した。指定工期は翌年一月で、実に半年も工期を縮めるといふ記録づくめの急速施工である。しかも掘りあがって、一滴の湧水の垂れ流しもない。常磐の立坑史上、望んで止まなかったドライな立坑の誕生でもあった。

寝ても醒めても立坑、立坑と、立坑オンリーで過ごした十一か月だった。私の実稼動を日延びにする、四百余日にもなる。それでも好きの道に辛勞なし、後半は立坑も仕事も愛しくなり、余力さえ残して任務を終えることができたのである。

北沢社長から、全員に特別褒賞の金一封が手渡された。およそ前代未聞である。

立坑事務所の二階にござを敷きつめ、解散式をかねながら乞食の酒盛りを開いた。

私はみんなの健闘をたたえ、年末着工予定の泉田第二立坑での再会を約した。

工員の大半は坑道掘進で時を稼ぐが、またの旗揚げまで呑気に遊ぶという者もいる。親会社の破員と坑口が一緒では気色が悪いと、何をするとも言わずに離れていく者もいる。手枷足枷を何よりも嫌う連中だから、私はあえて拘束しなかった。

上半身丸裸の茂吉が、座布団を三枚も尻に敷いて、さかんに檄を飛ばしていた。周囲から痛烈な野次を浴びても、「この野郎、アッハ、ハ」と笑い飛ばしてご満悦、いかつい大達磨が七福神の布袋様になりきっていた。

最後は、「なみだ船」の大合唱。

誰もさよならとは言わないで、

「どうも、どうも」

「どうも、どうもね」

と言って、淡々と散っていった。

5

泉田第一立坑の褒賞金と夏季賞与で、私は初めて妻と水入らずの旧婚旅行をした。

結婚以来十二年、コブつきの家族小旅行をしたことはあるが、いつの日か夫婦だけの旅をして、手抜き結婚の穴埋めをしたいと念願していたものである。

そのため、まず娘（小学五年生）と息子（小学二年生）を妻の実家に先発させた。交通事情が悪いうえ、秋田の大館までは常磐線、東北本線（盛岡まで）、花輪線と、乗り替えを含めて十五時間もの長旅である。妻は危ぶんだが、これも社会勉強のうちと、私は超満員の夜行列車に子どもたちを押しこめた。

息子の大助の首には、目的駅と乗り替え駅を明示したブラカードを吊るした。娘の真知子は子どもながら通路に仁王立ちして、眠りこけている座席の大人たちを睨んでいた。彼女には、「決して他人を当てるな」と、きつく戒めておいたのである。

大助は姉にひと寄りそい、胸のブラカードを頼りなくもてあそびながら、ホームの母の顔を心細そうに見つめていた。

一日おかれて、私たち夫婦は、蔵王と男鹿半島めぐりの二泊三日の旅に出発した。

天候に恵まれ、蔵王連峯の素晴らしい景観を堪能したあと、初日は山形の天童温泉に泊まった。一日中、私はまるで恋人の欲心を買う若者のようにあれもこれもと尽くしたが、三十二歳の女房はおくればせの夫の過剰サービスを持って余し気味で、観光バスの中では居眠りばかりしていた。

三日めの夜に、妻の実家で子どもたちと合流した。娘の報告では、終始自力で冒険旅行をこなしたという。起こしてあげるから安心してお眠りなさいと言ってくれた大人たちは、肝心の乗り替え駅でも大

口をあけて眠りこけ、何の足しにもならなかったらしい。

翌日からは家族揃って十和田湖や弘前を見て回ったが、誰よりも妻が、辰の口社宅からの解放感がたまらないと無心で喜んでた。

もうさほど言葉もいらぬ夫婦と親子の仲だが、それぞれ思いだしたように勝手に話がはずみ、なんとも賑やかな旅となった。

秋口、止水工法の発明と急速施工の成功により、東部炭硯技術協会より技術賞を受けて記念講演を行った。賞のプレゼンターは、協会長でもある常磐炭硯の大越社長である。

並んで記念撮影をしたが、「おクマ婆っばあの孫だもんなあ」と冷やかされた。祖母は八十九歳で十年前に大往生をとげていた。

大越社長は、その直後に勇退した。後任は労務軍団の総元締めで、ついに常磐炭硯は労務屋たちの手に落ちたのである。

泉田第二立坑は第一立坑の東南約2キロの、浜街道沿いに位置する。湯長谷の崩落事故の際、充填土砂を採取した場所でもある。

まず入気兼用の運搬立坑（内径6メートル、深さ637メートル）に着手するが、半年後には同一規模の排気立坑2号坑の着工が予定されている。異例の同時開削に、生き残りに必死な親会社の苦悩と焦りが如実にうかがえた。

またもや、きつい工期が厳命された。

覚悟のうえだが、硯務部事務係長が、泉田第一の実績は詐欺まがいだとけちをつけ、請負金額を極端に値切ってきた。あまつさえ、止水工事の設計変更まで握り潰そうとした。

渡辺たるや、事務係長のメッセンジャーボーイになりきって、何の足しにもならない。

「あれは企業努力」と庇^{かば}ってくれるならまだしも、言いなりになった方が身のためと脅す始末だ。部下は全く浮かばれない。

立坑の交渉窓口は西部硯の副長で、湯長谷の崩落事故の際、指揮班の副キャップをつとめた高木である。彼も事務係長の傀儡^{かたがら}でしかない。私は硯長室に押しかけ、鼻であしらって話を聞こうともしない高木に腹を立て、

「てめえらは、役足らずの薬液によだれを垂れ流しておいて、なんて言い草だ！」
と、怒鳴りつけてしまった。

高木の元上司でもある矢部部長のとりなしで、止水工事の実費だけはもぎ取ったが、屈辱的な請負い契約は呑まされた。喧嘩両成敗、痛み分けというところである。

着工前夜、飛んでもない椿事^{チネシゴ}が起きた。

自宅で労務係と前祝いの酒を飲んでいたところに、元工員が、「俺一人ばかりをのけ者にしゃがって」と、暴れこんできたのである。彼は広域暴力団の準構成員で、気違いじみた狂暴性を理由に労務係

が除外したものである。泉田第一立坑の後半に紛れこんできたもので、現場では正体や狂気を見せたこともなく、私にもとても愛想がよかったのである。

彼はいきなり台所に駆け込み、出刃包丁を抜き取って座卓の前に立ちはだかった。その包丁がぶるぶると震えていた。その形相を見上げた途端、私はぞっとした。左右の目が、全くちぐはぐに動いていたのだ。

これは危いと、さすがの私もひるんだ。

と、わが目を疑うような光景が現出した。

なんと妻が男の前に飛びだし、両手を広げて立ちはだかったではないか。

「主人をどうするってんですか。刺すなら、私を先に刺しなさい。さあ、刺しなさいッ！」

甲高い妻の叫びに、一瞬、大の男たちの時間がはたと止まった。

愕然……啞然……。

男が、いきなり包丁を投げ捨てた。

と見る間に、彼は獣のような訳の分からぬ奇声を発しながら、玄関を飛びだしていった。

妻が、へたへたと畳に座りこんだ。子供たちが駆け寄り、母の両肩にすがっていた。

労務屋が妻の前に、「恐れ入りました」と平伏していた。

私は、まだ呆然として声を呑んでいた。

娘は、子どもながら親の敵に眼をつけていたらしい。やはり男の目の異常さを指摘していた。正気と

狂気は紙一重か、何も知らず立坑に爆弾抱えていたのかと思うと、あらためて背筋が寒くなった。

立坑の何が良くて、彼がそれも気負いこんで再応募したのか分からない。その怒りには、ボイコットされたという単純な恨みばかりとは言えない何かがあった。あるいは彼なりの自己同一性を、思いがけなく独立愚連隊に見つけていたのかと考えると、人間を選ぶことの難しさをつくづく思い知らされた。

茂吉がぶんのめしてくれろと息巻いたが、そっとしておいてやれと制した。

それにしても私は何も出来なかったばかりか、一生に残る大きな借りを妻に作ってしまった、亭主関白も台無しの特事となったのである。

なにやら物騒な幕明けになったと用心していると、今度は不意に渡辺が、茂吉を坑道掘進係に返してくれと頼みこんできた。

新規に受注した大日本炭鉱勿来鉱業所の坑内工事を担当させるという。言わば出稼ぎ、誰も敬遠してなり手がいないのである。

何を今更と思ったが、茂吉の独立には絶好のチャンスである。名実ともに作業所長にしろと注文つけて、渡辺の要請を呑んだ。

すでに茂吉は、現場の監督者としても大脱皮をとげていた。泉田第一立坑で、施工管理から原価管理まで、私の手法を盗むようにして貪欲に吸収していたのである。

虎を野に放つ恐れはまだ多分にあるが、よその炭鉱に乗り込んで荒仕事をこなし切れるのは、茂吉の

ほかには見当たらない。

私は、行け行けと、茂吉の尻を叩いた。

ところが彼は俄然硬化して、私のそばを金輪際離れないと目を剝いた。そのあげく、
「そんな冷たい親方とは思わなんだ。親方、親方はこの俺を突き離すのか。これから先、たった一人でやっつけて言うのか……」

と、机に突っ伏して子供のように駄々をこねた。
虚を突かれて、私は言葉を失った。

人間だ、人間性だともっともらしいことを説きながら、私はそれほど打ち込める相手がいない。またぎすぎすしたヤマの空っ風に吹きっ曝されて、そんな一途な感覚もとうにすり切れてしまった。それだけに、人を人とも思わないような茂吉の意外な反応に、私はうろたえてしまったのである。なんとなく自分の底の浅さが割れたようであり、概念的にしか人間をとらえていなかったのではないかと忸怩たる思いがした。

だが好機逸すべからず、これは新生茂吉の真価を問う試金石だと強調、独りがそんなに怖いかと、心を鬼にして突き離れた。

それがぎいたか、茂吉がやおら顔をあげ、

「親方、分かった。よおっく分かりやした」

と言って、天井を仰いで瞑目した。

閉じた瞼から涙が一筋、つっと流れた。

乞食の酒盛りで、茂吉の門出を祝った。

そうと決まれば主客は転倒して、茂吉は何から何まで自分の壮行会を自作自演した。どこから調達したのか、刺身や寿司の大盛りから焼き鳥まで所せましと並ぶ、かつてない豪勢な酒盛りとなったのである。

茂吉は、鼻息も荒かった。係員らに、

「いいか、俺が此処の総領だ。それを忘れんなよ。ちよくちよく戻ってくつから、そんなとき粗末にしたら、ただで済まねがらな」

と、一発ぶちかました。

「モーヤん、来るときは手ぶらであんめえ。それによりけりだ。なあ、みんなあ……」

星野がすかさず冷やかすと、茂吉は、

「任せておけ、天下のモーヤんだあ」

と、太鼓腹を叩いて何々大笑していた。

その夜、湯本の馴染みの酒場で、私は茂吉としんみり別れ酒を飲んだ。

「学のねえモーヤんに、こんだけ親身に教えてくれたのは、後にも先にも親方しかいねえ。何処に行こうが、あんたが俺の親方、それだけは忘れんでおくんない」

茂吉は私の手を握り、声をつまらせた。

最気の流しが現れるや、彼はそのギターをふんだくって、「人生の並木道」を切々と歌いだした。柄にも似ずギターが上手なら、歌声も聞きほれるほど寂さびていたのである。

作業所長として押し出してやったものの、彼の身分は職員でも最下層の雇員である。それら昇格人事はすべて親会社の手の中にある。どんなに実績をあげても、彼の身分は終生変わることはあるまい。

茂吉の右腕には、焼きゴテで刺青を消しかけたようなミズ張れがあった。見た目にも痛々しいが、そんな半端な消し方に人生への彼のためらいもあれば恥じらいもある。また、天涯の孤児の悲哀も、闇雲に生きてきた一匹狼の血を吐く思いもにじんんでいた。

茂吉が歌い終わると、私は流しに目配せして、いつもの「なみだ船」を所望した。

6

泉田第二立坑1号坑の着工は師走半ば、五か月振りで独立愚連隊が勢揃いした。

私は磯係員を主務者代行に抜擢、彼に直接工事の采配を委ねた。この立坑で名を成さしめ、正式職員に推挙する魂胆である。

磯の後任には、保安係員の資格を取得したばかりの若者、佐川隆を登用した。長身の優男で、常磐炭砒の落ちこぼれである。見るからに腺病質なタイプだが、立坑に来てみるみるうちにたくましい男になった。恋女房で勝気な彼の妻が、「立坑でやっと男になった」と、手放しで喜んでいたほどである。

新たに、大平なる機電係員が参加した。年頭の人員整理で勇退した元常磐の職員で、磐城中学（旧

制）の先輩でもあった。

立坑敷地は、東と南に開けた広大なもので、東側にズリ捨て場となる細長い谷が発達していた。私はズリ捨てを小型ダンプで行うタイヤ方式に切り替え、町の土建屋に請負わせた。それと、築壁方式をコンクリートブロック積みに戻したのが大きな変化である。

滑り出しはまたも快調で、部下たちはことさら気負いも見せずに、たんたんと工事に融け込んでいった。その中で、磯の陣頭指揮と粘り強さが特に光っていた。私の上うへ前まへをはねるような仕事ぶりだ、言わず語らず、同僚係員や工員たちの心服を着実に物にしていったのである。

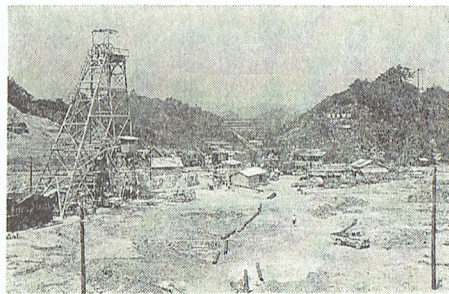
茂吉を欠き、愚連隊の柄が少しは良くなるかと思っただけが、期待はずれだった。思い出したように現れては、「位置につけえ」と、乞食の酒盛りを強請するのである。

新天地の水が性に合ったのか、早くも天下を取ったような勢いである。

「モーヤんだもの。あんな炭坑の奴らなんか目でねえ。所長も砒長もみんな友達だあ」

茂吉の怪気炎は止まるところを知らない。

いささか心配になって、「礼だけは失するな」とたしなめたが、



当時の泉田第二立坑の全景。左のやぐらが立坑の入口

彼はろくに聞かず、

「大丈夫だってば……信用してくらっせ。こんでも親方なんかよりはずっと紳士的なんだから。いっぺん、見に来たらよかつべ」

とぬかして、鼻をうごめかしていた。

彼が紳士である訳はないが、今だに殿様商法であぐらをかいている常磐開発の職員層の中では、ずばぬけてパイオニア精神が横溢している。いささか野放図で図々しいが、開発途上国のわが社ではこんな型破りな個性の輩出こそ望まれるのではないかと、呆れながらも内心ではひそかに拍手を送っていた。

私は着工の前に、長倉炭坑の通勤バスが閉山で売りに出されるといふ話を聞き込み、安く譲り受けてこいと妻を仲人宅に走らせた。仲人は長倉の社長である。

仲人夫人を通じて話ほとんどん拍子にまとまり、工員や係員たちの通勤は、幌馬車からボンネット型の中古バスに大昇格した。

ボンネットは時代遅れもいいところだが、運転手や工員たちは大喜びである。

相変わらず井原はやんちゃな韋駄天だが、小柄な彼が運転席に座ると子どものようにも見える。それでもハンドル捌きや減らず口はプロ以上にまかせていて、すいすいと車の波を器用にかき分けていく。

喧嘩政はいつもねじり鉢巻き、威勢のいい唖声を切って親会社の通勤バスを追い越し、大きな尻を振り振り飛ばしていく……。

7

明けて昭和三十九年一月二十二日の夜半、東部磁湯本六坑で、主務者が行方不明になるという前例もない異常な事故が発生した。

その主務者が誰あらう、私と同期の野地智なのである。そして、なんと、現場が私が担当していた北光坑水抜斜坑ではないか。

さらに悲報は続いた。

野地の搜索に向かった一班三人が熱中症にかかり、係員二名が殉職、班長の主務者が重態に陥るといふ二次災害が発生したのである。

殉職者の一人は私の旧部下で、他の一人も顔馴染みのベテラン係員だ。二人とも、斜坑五目抜の排気側坑道で絶命している。重態者は鉦専の一年先輩で、彼は同じ目抜坑道の入気側で意識を失っている。

いみじくもあかまり、現場の実態が浮き彫りになった悲惨な事故だが、それほど水抜斜坑の入・排気の温度差は激しく、天国と地獄が通気戸一枚で仕切られているのである。

熱中症を最も警戒しなければならぬ問題現場なのである。特にやせ我慢が禁物で、無警戒なやせ我慢が死を招くのだ。昏倒寸前まで意識ははっきりしているし、体力的な衰えもそう自覚しない。不意に、バッテリーと倒れてしまうのである。

だからつい無理して、排気坑道を我武者羅に歩き回ってしまうことが多い。あわやという間に、ふと入気側に抜けて助かったという経験を何度か私もしていたのである。

受難の捜索班もそうなら、行方不明の野地も、そんなあかまりの恐るべき落とし穴にまんまとはまったのではなからうか。

必死の捜索にもかかわらず、野地の行方は杏として分からない。私は夜は坑口人車場に詰めて、対策本部の動きを窺越しに見守っていた。部外者なので立入りもできなければ、口もさしはさめないのである。対策室では、礮業所と東部礮の首脳陣が、坑内現場の拡大図面を前に思案投げ首、いずれも茫然たる表情だ。たまたま顔を合わせた若松係長次席に、「なにもたまたましてんだ」と嘯みつくと、

「隈なく探したんだが、何処にもいねえんだ」

と言って、彼もまた狐につまれたような顔をして途方に暮れている始末。

（野地よ野地！ いったいお前は何処にいるんだ。何処で迷子になったんだ!?）

勝手知った古巣である。胸突き八丁の魔の坂も迷路も、そして見落としやすい袋小路もまたそらんじている。許されるなら、すぐにでも入坑して探し歩きたかった。

頭にある私なりの坑内図をひもとけば、どう考えても水抜斜坑の内、それも二次災害が発生した近辺でしかない。熱気を含む流黄分が痛いほど目にしみる巡回路中の難所で、いつも私はその目抜で入気側に逃れ、一息入れていたのである。

聞けば捜索の手は、隣接区域の排気坑道の方まで範囲を広げているという。そんな遠くに行っているはずはないと私は即座に打ち消して、五目抜から上の排気側をシラミ潰しに探せと、若松の尻を叩いた。

事故発生からまる二日めの夜半、野地の炭坑杖と目鏡が発見されたという第一報が飛びこんできた。果たせるかな、五目抜の排気側だった。

次いで、五目抜に続く左五片の沿層坑道で遺体発見、という報告が舞い込んだ。

それにしても、野地が目鏡も炭坑杖も放りだしてしまった場所のわずか数米先に、入気に通ずる通気戸があるのである。折角そこまでたどりつきながら、彼は踵を返して死の闇に我と我から吞まれていつている。それほど意識ももうろうとしていたのか。

野地は、立坑扇風機の風圧が異常に高いという通報を受けて、支線係員とともに緊急入坑している。

風圧は、排気坑道で落盤などの異変が発生すると異常値を示すのである。

しかし、彼に同行した係員は体の不調を訴え、高温箇所で途中離脱していた。

あるいはその時点、野地自身にもあかまりの赤ランプがついていたのではないか。そして係員が音をあげたとき、彼も何か言わんと口をもぐもぐさせたのではなからうか。それを言い切れぬ吃り癖を持って余しながら、つい死出の道を急いでしまったような気がしてならないのである。

口をもぐもぐさせながら、熱気の闇を踏躰とさ迷い歩く彼の姿を思い描くとなんともやりきれなかった。

遺体に乗せた人車が坑口に着くと、私は部外者という遠慮をかなぐり捨てて飛びだし、担架の先棒をふんだくった。

野地の死に、戦後の華やかな炭坑労働史の陰で、最も割の合わない役割に耐えていた現場職制たちの

悲哀も命運も凝縮されていた。その身につきまとう危険性や精神的肉体的重圧は、坑内の表通りしか歩かない破員たちの比ではない。それを世間は知らない。また、知らされていない。

思えば四年前、湯長谷立坑の崩落事故をきっかけに、雀卓を囲んだ四人の運命はそれぞれ大きく変わっていった。

私は地獄の責め苦を味わったばかりか、子会社に売り飛ばされてしまった。

水抜斜坑は阿部が引き継いだ、やがては彼も系列の常磐ハワイアンセンターに引き抜かれていった。モグラからレジャーホテルの支配人、と百八十度の転向で、蝶ネクタイが似合いそうな男伊達を買われたのである。

阿部の後任がすなわち野地で、麻雀では常勝の彼も水抜斜坑では魔のヤマに魅入られ、あえなく非業の死をとげた。

若松は、野地の骨を拾った。

けだし水抜斜坑は運命の岐路か、つれなくも余りに皮肉なめぐり合わせに、人間の意志は無力だとする運命論には否定的な私も、すっかり気が滅入ってしまった。

8

工事は極めて順調に進行した。

私はムルデをさらに大型化して、キブルへのズリ積み時間を約30秒に短縮した。

渡辺が購入したグライファーは、ついに陽の目を見ることがなく、そのまま永久にお蔵入りとなってしまったのである。

コンクリートブロック積みも、シビアな時間管理で、コンクリートの流し込み方式をしのご実績をあげていた。ズリ捨てのタイヤ方式への転換は、大幅な経費節減となった。

それやこれや常磐式工法の周辺技術の改良開発で、請負契約上の屈辱的なハンディを次々と克服した。窮すれば通じるものである。

五安砂岩層では泉田第一を上回る大湧水を見たが、これも無難に処理して完全止水に成功した。私の止水工法は、すでに住友建設側でも採用実施している。

磯が注入作業の先頭に立った。打ち止め時は特に細かい神経と粘り強さが必要だが、彼は見事に処理した。まずまず、彼のやることなすことが私に似てきたのである。

桜が満開のころ、あの吉田茂がひょっこり立坑事務所に現れた。

「係長、長いこと、済みませんでした。俺、今日から、坑内にもぐっからあ……」

「……………!?!」

急の出現と申し出に、私は面食らった。

とつづくに彼の復帰を諦め、病後保養と軽作業への就労を労務係に頼んでいたのである。慌てて制止したが、彼は聞くものではない。

「いやあ、何でもねえですよ。そのつもりで来たんで、ンでなきや、来ねがったですよ」

吉田はさらりと云つてのけるや、さつさと作業衣をひっかけて坑口に向かつていった。びっこをひいていた。事務所に置き去りにされた彼の下駄も、片ちんばだった。あつと言う間の、原隊復帰だった。

誰が知らせたのか、茂吉が初鱈をぶらさげて吉田の復帰祝いに駆けつけてきた。「茂やん、お前も男だな。惣れ直したぜ」

身の毛もよだつような墜落を屁とも思わない吉田の肝っ玉には、茂吉も舌を巻いた。その酒席で、磯が、記録に挑戦したいと言いだした。ほかの係員も同調すれば、吉田茂までが「やっべ、やっべ」と、大乗り気だ。

ときに住友建設も立坑を施工中で、五月に狙いをつけ、今度こそ私を追い抜くと息巻いていた。ころやよし、こつちも白坂真岩層に突入したばかりである。私もむずむずしていたのだが、はからずも部下に先手をとられる形になってしまった。しかし、記録づくりの重圧や怖さを知っているだけに、「良かった、やってみろ」とは、すぐには言えない。

すると茂吉が、こごとと磯の肩をもち、「みんながその気になってんだ。親方は黙って見物していたらいいべ。素直になっせえ」と、私の口も手も封じこめてしまった。

まるで隠居扱いだが、そう言い切れるほど成長したかと思うと嬉しくなった。私は、「じゃ、やってみろ。だが記録、記録としゃっちこ張るな。あくまで自然体でのぞめ」

と戒めて、磯らに承諾を与えた。

しかし、いざ始まると、見ている私の方がこちこちに固くなってしまった。私は自分で自分を深みに追い込む方だが、磯ら係員や工員たちはそんな重圧は全く気にならないようだった。それどころか、ええいやあつと掛け声も勇ましく、互いに火花を散らして鎬を削っているのがある。



立坑工事で新記録

六坑第五と泉田第二の努力

五月の立坑工事、弊廠礦務所もつは住友建設が購買の新記録が二所られ、近くにある六坑第五立坑、同坑で礦業所長から表彰されると、又御連八四・六〇、八五・二二、平均八四・九米なつてゐる。そのつは開発会社が持つ。た泉田第二立坑一号坑、御連八五・五〇、八五・三三、平均八四・三三米なつてゐる。二〇、二七米であつた。

新記録を報じた地元紙

親会社の測量屋を通じ、彼我の工事情報は筒抜けである。当然ながら、一日一刻を争う火の出るような熾烈な闘いとなった。私は終始脇役だったが、自分が陣頭に立つ以上に、肩も凝れば神経もやせ細った。一方、部下たちは息づまる接戦に見事にせり勝ち、84・5メートルという新記録を堂々と物にした。住友側は84・5メートルに止まった。その差がわずかに2メートル。またしても彼らは独立愚連隊の後塵を拝する結果となったのである。手掘りを機械掘りが猛追するという、激しい記録合戦だった。まれに見る快挙だとして、両者とも礦業所長から特別表彰を受けた。社内報では、おそまきながら私の工事方針を全文紹介し、

チームワークの勝利であると評した。労組や組合員への牽制的効果を狙ったのは明らかで、そればかりは額面どおりには受け取れなかった。

部下たちの健闘に報いるため、私は、富士五湖經由熱海一泊のバス旅行を計画した。早速、立坑バスの内部改装を始めた。畳を敷きつめ、お座敷バスにしたのである。

「こんなオンボロで、箱根の山を越えられっかなあ。エンストしなきゃいいんだが……」

「いざとなったら、みんなの後押しすつから大丈夫だっべ。そう心配すんなよ」

さすがの非原運転手も危ぶんだが、物は試しだと、みんなが無責任にけしかけた。

車中二泊の強行軍である。私は、年配者が多い坑外夫には特別有給休暇扱いとした。

私は、浴衣がけて乗りこんだ。

部下たちも粗野な旅支度で、いずれもはだけたシャツから胴巻きがのぞいている。半数ほどがハンチングにサングラス。それで結構しゃれのめしたつもりでいる。一人、稼ぎ頭の先山の蝶ネクタイが異彩を放っていた。

驚いたことに、喧嘩政がわざわざ背広を新調、それを包装箱のまま運転席の網棚に飾っていた。吉田茂は、片ちんぼの下駄と片ちんぼの皮靴と、二セット御持参である。

これでは行く先々、またも衆人環視の的になりそうだと、早くも私は観念した。

乙女峠ではバスはもう息も絶え絶え、それ頑張れ、やれもう少しだと、井原に応援野次が乱れ飛ん

だ。数珠つなぎになった後続車が盛んにクラクションを鳴らしたが、サングラスの面々が一斉に窓から身をのりだして脅すと、びたりと鳴り音ひそめてついでにきた。青息吐息まじりの、なんとも切ない箱根路となったのである。

渋滞する熱海の日抜き通りでは、ボンネットバスは嫌でも好奇の人目にさらされた。ついには学童たちが寄ってたかって、「変テコな葬式バス」とはやしたてた。餓鬼が相手では喧嘩にもならず、さしもの独立愚連隊もげんなりと往生してしまった。

海岸通りの大月ホテルを予約していたが、私は風化防止用のニスを塗った貝化石の大塊を手土産に持参した。それをまずフロントに突きだし、「これは名刺代わり、柄も口も悪い連中だが宜敷く」と、挨拶した。

支配人が、貝の化石に深々と最敬礼した。

手土産がきいたのか後難を恐れてか、楽団貸し切りの特別待遇だ。「なみだ船」の大合唱が湧いたのは言うまでもない。

翌日は鎌倉見物。込み合う湘南道路も鎌倉の町通りも、立坑バスは悠々と走った。だが夜の東京、オリンピック道路と呼ばれる高速道路では、走れど走れど後続車にすいすいと追い抜かれ、さすがの喧嘩政もしゃんとなってしまった。

大変な大旅行だった。オンボロバスもまさに決死敢闘、よく酷使に耐えたのである。

これを機に立坑バスは通勤用のほかに、家族ぐるみの行業に盛んに使われた。釣り大会も開け

ば、小名浜の花火大会にも家族を満載して出掛けた。盆休みにはまたお座敷バスにして、有志の家族旅行に提供した。

稼ぎもさることながら、わが立坑独立愚連隊は遊びにかけてもおよそ桁はずれだ。「者ども、位置につけえ」となると、それ来たとはかり、オンボロボバスにすし詰めになって何処にでも走りだすのである。

バスも八面六臂（みづび）の活躍、いまや名実ともに立坑の象徴的存在になった。

9

九月初旬、2号坑が着工の運びとなった。

1号坑は予定より二か月も早い快足ペースで、坑口下400メートルに達していた。

坑道掘進係から移籍の係員も含め、一挙に百二十名の大世界にふくれあがった。磯が、同じ炭住の職者を集団加入させた。そのため、立坑バスの運航距離も倍増した。

旧メンバーを二分して新旧混合の二チームを編成して、両立坑の同時作業を進めた。

古顔と新顔、そして併行作業のもつれを心配したが、混乱は全く見られなかった。むしろいい意味で競合する形となり、かえって仕事に相乗的はずみがついたのである。

ところが、着工間もない2号坑のズリポケット内で、感電死亡事故が発生した。

罹災者は、私が重宝してやまなかった鍛冶工の須田安治である。彼はムルデの製作者でもあり、私の



事務所わき五安の池前で（後列右端が墜落した吉田茂。前列右端が感電事故で死亡した須田安治。筆者、前列左から3人目）

発想（アイデア）をすぐ製品化してくれる器用な職人だった。万事に慎重だったが、降りみ降らずみの霧雨が油断を招き、鉄板熔接作業中に感電死してしまったのである。

仕事の合間に、彼と工夫を凝らして作った箱庭風の池が形身となった。名づけて、「五安の池」。魔の五安砂岩層をもじって、「保安第一」の看板も掲げている。

人並み以上に危険な現場を担当してきたが、まだ一人も部下を死なせていなかった。モグラ仲間では珍しいほどである。それをひそかに自負していたのだが、よもや坑外で死亡事故を起こすとは思いのほかもほかで、私は手ひどい衝撃を受けた。

そればかりではない。不幸は連れを好むのか一か月もたたずして、実に奇々怪々なキブル墜落事故が両立坑で連続発生した。

原因や状況は全く同じで、降下中のキブルガスカ

フォード位置でロープから離脱、20メートルもの下の坑底に落下したのである。坑底では掘進作業中だったが、奇跡的に全員がかすり傷一つ受けずに助かった。

いずれもフック（キブルの吊り金具）のスウキーベルが粉碎していた。スウキーベルはロープの揺り戻し金具で、ボールベアリングをはめこんだ上下二つの回転リングを内蔵していた。その回転によって、ロープのキブルへの直接干渉を断っている訳である。

そのスウキーベルとライダーが一对になって、昇降中のキブルの安定を保つ。だが、ライダーはスカフォード上段のライダー受けまでで、その位置でロープもキブルもフリーになる。その瞬間、ロープの揺り戻しが一時、かつ急激に作用し、スウキーベルは甲高い金属音を発して猛回転するのが常だ。その猛回転でスウキーベルが粉碎したのである。

人身事故でないにせよ、全山の機電関係者が頭を抱える未曾有のミステリックな事故に発展した。もちろん立坑史上前例がなく、やれ欠陥スウキーベルだとか金属疲労だとか、あるいは何万回のうちのたった一度の偶然だとか、関係者の原因追求は諸説紛々としてさっぱりまとまりがつかない。

私は、恐怖のどん底に陥った。

もはや生半可な原因究明や対策では済まされないと、私は両立坑を封鎖して、即刻作業を中止した。仕事をぶん投げたのである。

私が望むと望まないにかかわらず、鉱山保安監督部から操業中止命令が出た。

連日、厳しい原因追及と調査が続いた。

まず私と大平機電係員が、犯罪者もどきの厳しい事情聴取を受けた。捲き上げ機器はすべて親会社の供用品で、据えつけから定期的保守管理は親会社に属し、そのため機電係員が隔日ごと来所している。監督官は重箱の隅をつつくように責め立てたが、私らの日常点検や管理上の手落ちちは皆無だった。

監督官は、その矛先を親会社に向けた。

私の管理にさも問題がありそうな事をほめかしていた炭鉱側が、俄に慌てくさった。

五日におよぶ審問の結果、主捲きロープそのものに問題があるとして、厳しい改善命令が親会社に突きつけられた。両立坑とも、主捲きロープを反応力のより少ない新種ロープに全面交換せよというのである。

監督官の指摘を待つまでもなく、主捲きロープの特性に触れる原因説がなかった訳ではない。だがその全面交換となると、費用も莫大ならロープの振り替え工事に一か月ほどかかる。だからあえて伏せて、親会社は工事再開を私に急かされた嫌いが多分にあった。私が、何も彼もぶん投げた訳でもある。

親会社は、しぶしぶ改善命令に従った。

しかし、そんな審判も対策決定も、もはや私の傷心を少しも癒やしてはくれなかった。

即刻立坑を放及して逃げだしたいほど、完膚なきまで叩きのめされていたのである。

それに監督官の原因追及にしても多分に三段論法的で、この事故を十分に解明したとは言い難い。改善命令に従ったとしても、百万遍に一度の偶然が千万遍に一度の確率に薄められたようなもので、私は

何かしら人智の及ばない運命的な天の摂理に戦々競々としていた。

もともとが小心者で、私の神経は人が言うほど図太くはない。茂吉が私を諷して、「親方のは仕事も喧嘩も集中力、だから怖い」と言ったが、それにしても迷いに迷い、くよくよしたあげくの果ての集中力なのである。その集中力とやらも、この奇怪な連続事故でぶつりと切れてしまった。

取り調べがすむまでは監督官らに事務所を占領され、私は身の置き所もなかった。転々と場所を変えて、半ば放心状態で日がなうつらうつらしていた。傍が心配するほど、しおれ切っていたのである。

審判が到着後、北沢社長が人目を避けて私を宿直室に呼びこんだ。渡辺や部長は一度現われたきりだが、社長は毎日詰めかけて、事の成り行きに目を光らせていたのである。

「実は親会社に掛け合ってきたんだが、うちの会社はこれっきりで立坑から身を引くことに決めたよ。だから、この立坑だけはなんとか仕上げてくれ。親会社でも、君が投げだすんでないかとえらく心配していた。そんな君ではねえと言ってきたが、あともう一踏ん張りだ。気持ちを立て直してやってくれんか」

社長が、しんみりと私の再起を促した。

立坑完成後は土木課長のポストと大型看板工事を用意し、長きにわたった立坑の桎梏から解放してくれるというのである。

社長の優しきで、やっと私は蘇った……。

師走の一个月、独立愚連隊は湯本の町はずれ、常磐線と六号国道に挟まれた岩ヶ岡工業団地の造成工事で時を稼いだ。現場に、カマボコ型の大キャンプを張った。

作業は擁壁の基礎掘りだが、何をするにも部下たちの仕事は手っ取り早く、土木屋が押しつけるノルマも昼ごろには難なくけりをつけてしまう。余りすぎる時間を私は、

「ドジョウとりでもやって、ほまちを稼げ」

と言って、部下たちに解放していた。

部下たちは雲の子を散らすように四方に飛んで、泥んこになって獲物をあさった。ウナギもよくとれた。たまにはそれら獲物を徴集して、キャンプの中で乞食の酒盛りだ。茂吉が、陣中見舞いと称してしばしば現れた。彼が交じると、キャンプ内は割れんばかりに湧いた。

ときには北沢社長ものぞきに來て、一緒にドジョウ鍋をつついた。私の意中を察してか、社長は私になすがままに任せていたのである。

チームの土気沈滞を恐れていたが、愚連隊は驚くほど頑強で、土木屋が意地になって押しつけるノルマを苦もなく片付けては、思いがけない休暇を楽しむようにドジョウとりで熱中していた。

私は、部下たちがキャンプを出払っている間は、一人つくねんとして気力の快復を計りながら、再起の方向を模索していた。

大晦日を前にロープ交換が終わり、保安監督部から工事再開の許可がおりた。

私はキャンプを撤収後、大部隊を引き連れて白鳥温泉のヘルスセンターに繰り出し、厄払いと再決起

の大忘年会を開いた。

事後承認である。特別稟議書を持って本部に走った星野に、経理部長が毒突いている頃は、もうどんちゃん騒ぎの最中だ。

この夜、私は正体がなくなるほど痛飲、部下に抱きかかえられて家に戻った。みんな寄っていきと言うと、私も我もとバスから降りてきて、わが家は踏み場もないほど人が溢れてしまった。

時ならぬ「なみだ船」の合唱が、辰の口社宅の闇夜を揺るがした。

10

明けて四十年二月下旬の日曜日。

私は全係員とその家族を立坑バスに乗せ、水戸借楽園の観梅に繰りだした。茂吉が、

「俺さまが行かねば、始まんねべ」

と、言って割りこんできた。

大変な人出だったが、茂吉が「ご免なんしょ」と人込みを掻き分けると、労せずしてすぐ手頃な空間ができてしまった。

私は開宴に先立ち、「三月一日を期して記録更新に挑む」と、部下たちに宣言した。

事前に打ちあげたのは初めてだった。気負い込んだのは私だけで、磯らは「そのつもりでした」と、

笑ってさらりと受け流した。

知っていたのかと聞くと、茂吉が、

「親方の顔に、そう書いてあつて。それが読めねようでは立坑もつとまんね。なあ……」

と茶化して、みんなを笑わせた。

笑いの渦で私の胸のつかえがとれ、肩の荷も軽くなった。1号坑は貫通して、2号坑は止水工事を終えて白坂頁岩層に入ったばかりである。私はその2号坑で最後の挑戦をすべく、ひそかに構想を練っていたのである。

モグラの総決算となる最後の立坑である。

また、独立愚連隊はこれきりで解散だ。

ラストチャンスと思う以上に、独立愚連隊への限らない愛惜の念が私を揺さぶっていた。これほどの素晴らしい人間たちと、これほどの強力なチームワークに恵まれることはもうあるまい。ならば最後の花道は最も人間らしい人間たちの、ハードな機械化時代への痛



家族を立坑バスに乗せて水戸借楽園に観梅としゃれこむ

烈な反証と、小気味よい皮肉で飾ってやれとあえて踏み切ったものである。
観梅は例によって無礼講、満開の梅もどっと相好を崩して私らをはやし立てていた。

三月半ば、1号坑が完成した。

2号坑の坑口からは、坑内の熱気が白い吐息となって静かに吹き上げていた。上空では突っ風が吹き荒れていたが、三方の山に囲まれ、立坑はエアポケットのように平靜だ。

安全施工即記録づくり、力むな騒ぐなど言い含めたせい、部下たちの闘魂や熱気は深く静かに潜行して鳴り音を立てない。

すでに、50メートルを越えていた。

初めて部下たちが、私の目標ラインに気づいた。これは桁はずれだと一時はざわめく声があったが、私の前でそれを口にする者はいなかった。そっとそっとという、思いやりにも似た空気がいつしかまわりに定着して、記録づくりには最も望ましい自主自律的なムードが生まれていたのである。

これならいけると自信を深めた矢先、突如として、部外者の労働組合から横槍が入り、内も外も台風のように荒れだした。

私の急速施工は、階梯長を20メートルと規制した保安規定（社内規定）に違反しているとして、即刻暴走的操業を中止させると、しつこく親会社に迫ったのである。

階梯長を可及的長大化して段取り替え回数を減らすのは、急速施工の常道である。そのため泉田第一

立坑からは計画的に、二週間以内でワンサイクルを完成するという期間規制に切り替えていたのである。

階梯の長大化にともない、支保工強度も強めたるえ、浮き石落下防止の金網まで素掘り坑壁に張りめぐらしている。さらにはヤマを悪化させる元凶の湧水も完全に止めた。言われるような危険性は全くないのである。それは住友建設側も同じで、保安関係者ばかりか、たまに現われる労組の保安専従者も周知の事実なのである。言わばその社内規定は自然消滅しており、死文化したも同然である。

親会社の常駐監督者もそれは百も承知だが、

「なんで今になってそう騒ぐんだか、さっぱり分かんねえ。でも相手が相手だ。黙って聞くしかあかんめ。そうしてくれねえべか」

と、頼むようにして私を口説いた。

「なにを今更ほざくんだ。ふざけやがんな。そんな寝言なんか聞いてられつかあ」

私は誰にともなく怒りをぶちまけ、監督者の勧告も無視して操業を続けた。

するとどういふ訳か、この私の捨て台詞や労組批判がすべて組合側に筒抜けで、さらに相手を硬化させる結果になった。私を戒告処分にしろと迫ってきかないという。

立坑の急速施工をあれほどせつついっておきながら、労組がこうも意地になって私の足を引っ張るのが、なんとも解せなかった。

やがて星野が、不意に私の袖を引いた。

「あいつだ、あいつだ。あいつですよ、密告者は。奴が組合を焚きつけてんですよ」
指さす先に目をやると、すっかり常連になった保安部係員がうろついていた。

(あ、そうだったのか……)

即座に、裏の裏が読めてきた。

彼は今でこそ保安部所属の一職員にすぎないが、以前は労組の副組合長としてのさばり返っていた。

だが組合長はおろか市会議員にもなり損ねて、結局は会社が用意した職員様のお仕着せを羽織った。それからは青菜に塩で、やたらと現場職制におべんちゃら使ってしょんぼりと世過ぎしていたのである。

だが、組合の肩書きで職員株を物にしたような奴なんか、誰も見向きもしない。哀れ彼は行き場がなくて、連日、離れ小島の立坑に現われては、日がな一日油を売っていた。

私は親会社の客人として比較的厚遇していたが、茂吉の人物評は最低だ。真顔で私に、

「奴は策士で油断なんねえ。そう人好くして甘い顔見せっさんな。信用しなさんな」

と、釘をさしていたのである。

すぐに茂吉が真相を伝えてきた。やはり付け火したのはその男で、組合選挙の集票がらみのごたごたとからんで一気に火の手が燃え広がったという。全く馬鹿げた愉快犯だ。

それにしても、余りにみみっちい。普段でも貧相な小男だが、訳を知れば、もう貧乏神のようにひどくうらぶれて見えた。

労組も労組だ。元副組合長への義理立てもあろうが、それを逆手にとって労使交渉の土俵に駆け上が

ったのが明らかだ。そんなとぼちりり、折角の計画が台無しにされたんでは目も当てられない。私は一歩も引くもんかと腹を括った。新記録に燃える以上に、労組への闘志が猛然と湧いてきたのである。

私は、徹夜で長文の所信を認めた。

法はともかく社内規定は技術革新の現状にそぐわないとして、わが保安対策は規定をはるかに超える強度と確実性をもつと述べた。さらに期間規制的な現行方式はすでに定着しているとして、方針変更の意志は全くないと宣言した。一応、表題は釈明文としたが、内容は堂々たる挑戦状である。

組合長宛名で労組本部に放りこんだほか、所長宛名で破務部事務係長に送りつけた。

俄然、組合が激昂、私の糾弾ビラを全山の掲示板にデカデカと貼りつけた。その反動的反動的姿勢許すまじ、断乎駆逐すべしと、なんとも激越な文句を長々と連ねていた。

破務部長が、血相変えて立坑に吹っ飛んできた。元東部破の山田破長である。

「事もあらうに、文書突きつけて喧嘩を売るとは何ごとだ！。君は組合ばかりか、会社にも法にも楯突く気か！。無茶にもほどがある。会社がどんなに迷惑するか、知ってんのか。何も彼もぶちこわしだ。言わんとすることは分かんんでもないが、組合を敵に回していい事は何もねえ。それがまだ君には分かんのか。会社は組織で動いてんだぞ」

山田は、苦い顔で私を怒鳴りつけた。

部下たちが見守る中で、私はこっぴどく罵倒されたのである。これほどの屈辱もない。

ともすれば崩れかかる気持ち辛うじて押さえ、私は終始黙りこくって意趣晴らしにも似た権勢の仕置きに耐えていた。

法を言うなら住友建設側の立坑も同罪なのに、山田や労組は一言もそれに触れない。片手落ちにもほどがあると思える喉も、必死で噛み殺していた。

お叱りは覚悟のうえだったが、相手が山田とあっては意地でも引けなかった。この場は黙るが勝ちとだんまりを決め込むと、案の定、相手はしびれを切らして腰を上げた。

「あんまり驚かすな。労務の連中が泡を食って、対策に^{おぼわわ}大童だ。とにかく自重して、これ以上騒ぎを大きくしないでくれ。頼んだぞ」

去り際には、意味ありげな苦笑を浮かべていた。体裁をとりつくろっているような笑いでもあったが、この人らしからぬ権力とは無縁な技術者の顔をふとのぞかせていた。

その後、密告者の足はぶつり途絶えた。変だなと思っていると、小林保安課長が足止めしたという。課長は立坑騒ぎで、身内のようにして気軽に出入りしていたのである。

北沢社長が、私の顔色を確かめるかのように、三日にあげず現われた。外野がうるさいようだなど一度言っただきりで、余計な事は言わずいつもそっと引き揚げていく。

気がつくのと、あれほどの騒ぎがびたりと静まっていた。それとともに、気紛れな来訪者もとんと姿を見せなくなった。そんな鳴り音ひそめた静けさに、親会社も含めた各関係方面のひそかな配慮をふと嗅

ぎ取った。

一方、部下たちの闘志は前にもまして盛りあがり、労組の鼻をあかすには是が非でもというびりびりした空気が坑内外に張りつめていた。一時は、立坑バスごと労組本部に殴り込みをかけようかと息巻いたのである。

吉田茂が、身に余る大型ピックを常人以上に軽々と扱っていた。鈴木係員は、私よりピック使いが上手になっていた。佐川も係員らしい風格が板について、たくましい立坑マンに成長した。今度も係員や工員たちの健闘が光り、私の出番は少なかったのである。

ついに、念願の新記録が生まれた。

掘進106メートル、築壁104メートル。ついに百メートルの大台を突破したのである。

工員たちが、異口同音に叫んでいた。

「こんでいいべ。こんでいいんだっべ」

11

新記録達成後、副所長でもある保安部長がひっそり立坑に現われた。

「いろいろあったようだが、またまたどえらい事をやらかしたもんだな。立派、立派……」
上々のご気嫌だった。

労組に遠慮してか、祝い酒は届かなかった。

今度ばかりは、労務も毅然として労組と対決したらしい。最後の最後に、思わぬ人からまたとない贈り物を買った感じでもある。

低品位の一般炭が危殆に瀕し、有力炭鉱の閉山が全国的に相次いでいた。

常磐の前途がさらに厳しくなったが、ここにきて従業員若年層の離山ムードが目立ち始めた。そのため親会社は、常磐開発の工員を吸収して短期破員とした。さらには開発の下請業者を根こそぎ引っさらって、その傘下におくという一方的な措置を強行した。

手足をもぎとられた坑道掘進係は、渡辺係長以下、北茨城市の茨城磁業所に新天地を求めて転出した。また渡辺は土木課長兼作業所長として、勿来火力発電所の取水トンネル工事についた。

大日本勿来炭鉱も閉山に追い込まれた。茂吉もしぶしぶ茨城入りした。

四月の末、私は日本鉱業に招かれて、秋田県大館の積稚内^{しんかた}磁業所を訪れた。

ときに同地区は黒鉱ブームで、新鉱開発や立坑開削が花盛りだった。そんな新規立坑の開削を鹿島建設に一括発注したが、鹿島には本格的な立坑の実績がない。そのためその下請になって、工事を助けてくれないかと頼まれたのである。

私は鹿島側に工事見積書を提出したが、それを相手が一方的に値切りだした。もともと日本鉱業への儀礼的な応礼だったので、私はすぐ不調にしてさっさと引き揚げてきた。

すると敵もさるもの、私を追いかけるようにして鹿島の所長が、土木屋をぞろぞろ連れて来て、私ら

の立坑技法をがめつく貪っていった。その辺は、さすがに抜け目がない。

七月末、私は、三か月がかりでまとめた立坑の総括論文を、磁業所磁務部に届けた。

全く自発的な意志によるもので、足を洗うモグラのけじめとも恩返しともしたのである。

好んで入った炭鉱ではないが、我と我から抜き差しならないようにもつれこんでいった部分がかかなりある。恩讐^{おんしゅう}相半ばする長い付き合いだった。こうして曲がりなりにも勤めあげられたのは、何かの加護や赦しがあったればこそと思う気持ちが強かった。

とりわけ湯長谷立坑以後は、知らず知らず宗教的領域に足を踏みこんでいたと言えそうな経過でもある。一連の新工法や記録づくりにしても、すべて自分の力量や努力をはるかに超えていた。さらにはあわやという墜落事故で、吉田茂をはじめ多くの人命が奇跡的に助かった。神か仏か知らないが、何か私を導いてくれたとしか思えないのである。

論文の末尾に、次のように書き添えた。

『ヤマや水は、人智や人力をはるかに超えているが、人間がそれらと共存しながら、人間を堂々と

主張できるという証明を、精強無比な部下たちが立派に示してくれた。その名も立坑独立愚連

隊。けだし、最も人間らしい人間、最も坑夫らしい坑夫の集団であった』

論文提出後の旧盆前、磐城磁業所があつという間に全焼した。

火元が労務課の倉庫で、碓員就業カード入りの山積みセルロイドが、酷暑と魔擦熱によって自然発火したという。火元と発火源が、なにやら皮肉めいていた。私の労作が灰燼に帰したかどうか、それは知るよしもない。

九月初め、2号坑が貫通した。

それを祝い、またお座敷バスを仕立てて、会津若松に日帰り旅行を実施した。

いよいよ完成が目前である。後はどうするようになるか誰も言わないが、誰もが名残りを惜しむように行列も輪も縮めて観光名所めぐりをした。かつてなく行儀が良かった。

十月半ば、ついに全工事が終わった。

独立愚連隊は、即時解散された。

その闘魂とチームワークは、坑口を出た途端、あつという間に中空高く舞い散った。

華々しい業績にもかかわらず、乾盃酒だけの、地味で物静かな別離わかれになった。

なみだ船の合唱も湧かなかった。

工員のはほ半数ほど、茨城の茂吉に托した。

常磐炭碓の短期碓員への道も講じたが、ほとんどなり手がいなかった。

半数の人間が、何をすると何処に行くとも言わず、ニヤリと笑って去っていった。

お世話さんでしたあ、じゃお元気で。

どうもどうも……。どうもね……。

12

立坑閉削係も消滅した。

これにより常磐開発は、磐城碓業所の坑内工事から全面的に手を引く形になった。

私は土木部に転属、年末着工の磯原工業団地（北茨城市）の作業所長に任命された。

産炭地域振興事業団の特命工事で、中央大手業者も食指を動かしたほどの大型公共事業である。そんな看板工事を、素人同然の私に任せるのは冒険だとする声が多かったが、北沢社長が強引に押し切ってしまった。

「モグラに、何が出来るってんだ！」

「ま、モグラさんのお手並みを、とっくり拝見させて貰いましょう。お好きなように」

早くも、嫌味と非難が私に集中した。

陽の目を見たばかりの、モグラを取り巻く環境は厳しく、立ちくらみしそうである。

磯が、正式に職員に登用された。彼は本部に残すが、星野と鈴木の両係員、そして運転手の井原を磯原に連れていく。佐川係員は茂吉に預けることにした。茂吉たるや、「磯原はもう俺の縄張り」とうそぶき、いまやおそしと手ぐすね引いて待っている。なにやら、新天地の雲行きもあやしくなってきた。

喧嘩政が、常磐交通のバス運転手にすんなりおさまった。制服制帽でハンドルを握り、神妙な顔付き

で六号国道を走っている。だが私を見かけるとクラクションを鳴らし、尻を大きくひと振りして過ぎていく。

一人、吉田茂が辞めていった。

「立坑でなけりゃあ……。立坑はもうないのけ」

一度は墜落、二度めはキブル落下という極限の事故にあいながら、彼はなお立坑に未練を残していた。会社勤めは窮屈で、のんびり性に合った適職を探すという。

まだろくな挨拶もしていなかったからと、離職票を貰いがてら土木部に現れた。星野や鈴木らを相手に、ひとしきりパチンコの講釈をして笑わせていた。今日もこれからパチンコ屋に行くところだという。相変わらずひょうひょうとして屈託がない。

井原が店先まで送ってやると言って、車庫から立坑バスを引っぱりだしてきた。それも明日にはスクラップになる運命で、計らずも吉田茂が最後の乗客となった。

窓越しに後ろ姿を見送ると、体を突っぱりながらバスのタラップに片ちんぼの下駄をのっけていた。キブルに乗り降りするときも体を突っぱらせていたが、見なれたつもりでもやけに後ろ姿が痛々しかった。

彼も昭和二年生まれの同年兵、かつ、どの記録挑戦にも参加した古参兵だった。

私は片手を胸に当て、そっと祈った。

(茂さん、ご苦労だったな。達者でな……)

あとがき

皮肉なめぐり合わせで、私は満五十五歳の定年退職の日に胃ガンの宣告を受けた。

再就職のために、半月前に受けていた精密検査の結果がその日に出たのである。

運がいいと医者が笑った。彼は、「こんな超早期発見は殊勲賞もの」と、自分の眼力を誇るよう鼻をうごめかしてもいた。

私は即座に入院して手術を受けた。

見舞いに来た娘夫婦が、夢うつつの私の枕元で、「お父さんの一生は書いても映画化してもおもしろい」と、話し合っていた。

娘は売り出し中のシナリオライターで、婿は駆けだしの映画監督である。

私は、慌てた。

なにしろ子どもたちは、「戦争反対」、「安保反対」、「暴力反対」と、ハタキや箒ホウキを振りかざして部屋から部屋へとデモっていた連中なのである。

果たして彼らが、昭和二年生まれの感性や思想にどこまで迫れるのか、あるいはどう表現するのかと心配になったのである。

また、はなはだ風評芳しくない閑白オヤジだった。家庭では気の向くまま勝手気儘に振る舞い、喜怒哀楽もあらわに良くも悪くも地の人間像を剥きだしにしていた。父親の何を取り何を捨てるか、取捨選択はお前たちの勝手次第とうそぶき、背中ばかり見せて顧みることがなかったのである。

『あえて言挙げせず』も、男の美学と教えこまれた世代である。ときには意識的に悪役を演じて、大乗的な舵取りをすることも多々あった。そんなオヤジの行動の裏を理解していたかどうかとなると大いに疑問だ。

(これは大変。嘘を書かれてはたまらん)

私は退院後、自分史に挑戦した。

ところがいざ書きだしてみると、あれもこれもと欲ばかりでてきて、自分史ほど收拾がつかないものはない。だからだられてでれと、手前味噌ばかり際限もなく続くのである。

そうなると、性急でこらえ性が無い昭和二年生まれである。我ながら間怠まだらっこさに嫌気がさしてたちまち開店休業、ついには物書きの柄でもない投げだしてしまった。

たまたま昨年、北九州市が自分史文学賞を創設して、募集要項を発表した。

原稿用紙三百枚まで、締め切りは十月二十五日と指定されていた。「定時定点必着」は作戦遂行上の要諦で、速戦即決は兵法の習いである。これだとばかり俄然闘志が湧き、一気に書きあげて投稿した。

生硬な文体や難解な専門用語、さらには反時代的な内容からあっさり斬って捨てられるかと覚悟していたが、好運にも受賞(佳作)の榮譽を得た。ガンの早期発見といい、悪運が強いと口の悪い友人が呆

れていた。

しかし、自分史とは関わりなく「独立愚連隊」は、いつの日にか陽の日を当てたいと構想を温めていたものである。私にすれば、書き足りないうらみが多々あった。

図らずもニューウ企画出版部の吉田編集長のお目にとまったのはこれまた僥倖で、願ってもない再構成の機会に恵まれた。枚数や既成概念にとらわれず、存分に描けばいいと励まされたのである。こんな果報はまたとない。

つたなくも破れかぶれの半生記だが、健気な独立愚連隊に折角の拍手を賜わり、あわせて昭和二年生まれの氏素性を少しばかり斟酌しんさくいただければ幸甚である。

受賞時、自分史文学賞審査委員長・三浦朱門、審査委員・佐木隆三の両先生からは、解説図面の添付など、出版に際しての懇切なご指導をいただいた。思いがけなくも、三浦先生が技術的描写に専門的なご理解を示された。ご好意に心から御礼を申しあげたい。

最後になったが、「学研」人文企画室長佐藤昭氏に満腔の謝意を表したい。言わば本著の生みの親である。

一九九一年秋

野木 英雄

たてこうどくりつぐれんたい
立坑独立愚連隊



TO YOU

ユーウブックス104

平成3年12月10日 第1刷発行

定価1,400円(本体1,359円)

著者 野木 英雄
発行者 吉田 裕
発行所 (有)ユーウ企画出版部
〒160 東京都新宿区新宿3-35-5
沢田ビル
☎03(3341)8405
振替 東京4-255897
発売所 株式会社星雲社
東京都文京区小石川5-19-25
☎03(3947)1021
印刷所 亜細亜印刷KK
製本所 協栄製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

© HIDEO NOGI 1991 Printed in Japan
ISBN4-7952-5584-9 C0095 P1,400E



野木英雄 (のぎ・ひでお)

昭和2年5月22日生まれ。昭和19年、福島県立磐城中学校(旧制)4年から陸軍予科士官学校入学、翌20年陸軍航空士官学校に進学、まもなく終戦で復員。昭和22年官立秋田鉱山専門学校(現秋田大)採鉱科に入学、同25年同校卒業、常磐炭鉱・磐城鉱業所入社。

昭和35年10月、常磐開発(株)に移籍、同45年神奈川県下の建設会社に転職、同57年定年退職。

横浜市金沢区平潟町31-2-902。